

# 小鎚川水系河川整備基本方針

平成 27 年 11 月  
岩 手 県

## 目 次

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	1
1-1 流域・河川の概要	1
1-2 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	3
2. 河川の整備の基本となるべき事項	5
2-1 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項	5
2-2 主要な地点における計画高水流量に関する事項	5
2-3 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項	6
2-4 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項	6

参考 小澁川流域概要図

## 1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

### 1-1 流域・河川の概要

小鎚川は、その源を岩手県上閉伊郡大槌町の白見山(標高 1176.2m)に発し、種戸川を合流しながら、大槌町を貫流し、大槌湾に注いでいる。その流域は大槌町のほぼ 3 分の 1 におよび、流域面積 62.7 km<sup>2</sup>、幹川流路延長約 26.4km の二級河川である。流域の気象は、年間降水量約 1,430mm、年平均気温は 10.4℃と年間を通じて比較的温暖な気候である。

小鎚川流域は、北上山地に位置しており、ほとんどが大起伏山地となり、北上山地内においても比較的急峻な地形となっている。大槌町域の表層地質は、大部分が泥岩であるが、小鎚川の上流部及び大槌湾北部には花崗岩質岩石が分布し、下流域には砂・礫・泥またはロームから成る沖積層が細長く分布している。

大槌町は三陸復興国立公園のほぼ中央に位置し、三陸漁場の豊かな水産資源に恵まれ、古くから水産業を基幹産業として発展してきた。この大槌町では町魚を「さけ」とし、また、小鎚川源流の新山高原において「新山高原まつり」に併せ植樹を行ったりし、海と川と山の繋がりを大切にしている。

小鎚川の近年の洪水被害は、内水による家屋の浸水被害が多く、昭和 54 年 10 月には、床下浸水 505 棟、床上浸水 101 棟の水害が発生している。その後、昭和 57 年 8 月、平成 11 年 7 月にも内水による 200 棟を超える家屋の浸水被害が発生している。

小鎚川の治水事業は、チリ地震津波対策として昭和 36 年から昭和 41 年にかけて河口から約 870m 区間で防潮堤の工事が行われ、更に昭和 39 年から昭和 50 年にかけて河川改修として上流側へ約 2,200m 区間の築堤、掘削等による整備を行っている。

また、三陸沿岸は津波の常襲地帯であり、大槌町においても明治 29 年 6 月 15 日及び、昭和 8 年 3 月 3 日の三陸沖地震津波及び、昭和 35 年 5 月 22 日のチリ地震津波で甚大な被害を受けている。そこで高潮対策として、平成 3 年からこれら津波による被害を防護するために明治 29 年の津波高 T.P. +6.40m を計画堤防高とした防潮水門方式による整備を行った。

平成 23 年 4 月には、東北地方太平洋沖地震で発生した津波を契機に、「岩手県津波防災技術専門委員会」が組織され、小鎚川河口部の計画堤防高は T.P. +14.5m と定められた。

河川水の利用については、農業用水として約 25ha の耕地のかんがい利用されているが、過去において渇水による被害は見られない。

また、水質については、「生活環境の保全に関する環境基準」で A 類型に指定されており、観測地点の古廟橋地点においても BOD75%値は環境基準を満足しており良好な状況である。

流域の下流域は、ヨシ、オギ原が広がっている。中流部より徐々に山地溪流を呈するようになり、沿川には、ケヤキ、クルミ、ヤナギ等の中高木も分布しており郷土の自然環境が保全されている地域であり、魚類ではヤマメやウグイなどが生息している。上流部は山地溪流の河川形態となっており、瀬や淵が連続し、沿川にはブナも出現する比較的自然豊かな河川環境が保たれて、魚類ではイワナ、カジカ、イトヨ遡河回遊型等が生息しており、溪流釣りが行われている状況である。

また、小鎚川ではサケふ化放流事業が行われている。

小鎚川下流域には、宅地が集中しており、公共施設も多く点在する。中流域の小鎚川両岸は、大半が水田地帯として利用され、宅地が点在している。上流域では、水田・宅地はほとんど見られなくなり、山地が大半を占めている。

これらのことから、洪水、高潮・津波から流域住民の生命・財産を守る「治水」、安定した水利用ができる「利水」、動植物の多様な生息・生育環境を保全し、うるおいと安らぎのある水辺環境を形成する「環境」のバランスのとれた、安全で魅力ある川づくりが望まれている。

## 1-2 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

小鍬川の河川整備は、近年の住宅地の開発が進展する流域の人々の生活を洪水及び高潮・津波から守り、安定した水利用のできる豊かな水環境を保全するとともに、うるおいある水辺環境を保全し、古くから守られてきた自然環境との調和を考えた河川整備を行うことにより、小鍬川が人々の生活に憩いと安らぎを与えるかけがえのない清流となるような川づくりを進めていく必要がある。

これより、小鍬川における河川の総合的な保全と利用に関する基本方針としては、河川整備の現状、水害発生の状況及び河川利用の現状並びに河川環境の保全・復元を考慮し、また、「大槌町都市計画マスタープラン」、「大槌町町勢計画」、「大槌町東日本大震災津波復興計画・基本計画および実施計画」等の流域内の諸計画との整合を図り、水源から河口まで一貫した計画のもとに整備を行うものとする。

小鍬川の洪水被害の軽減または災害発生に関しては、年超過確率 1/50 の規模の洪水を安全に流下させるため、築堤等を行う。

河川津波対策に当たっては、発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす「最大クラスの津波」は施設対応を超過する事象として、住民等の生命を守ることを最優先とし、津波防災地域づくり等と一体となって減災を目指すとともに、最大クラスの津波に比べて発生頻度は高く、津波高は低いものの、大きな被害をもたらす明治三陸津波程度の「施設計画上の津波」に対しては、津波による災害から人命や財産等を守るため、海岸における防御と一体となって水門等により津波災害を防御するものとする。また、地震・津波対策のため、堤防・水門等の耐震・液状化対策を実施する。

水門の整備に当たっては、操作員の安全確保や迅速・確実な操作のため、水門等の自動化・遠隔操作化を推進する。

また、地元自治体が主体となって作成するハザードマップの公表等や防災活動における情報提供などソフト面の充実に努めるものとする。また、堤防や護岸をはじめとする河川構造物や改修河道の維持管理を図り、その機能を十分に発揮できるよう努める。

河川水の利用に関しては、既得農業用水の利用の他に、流水の正常な機能を維持するため、動植物の多様な生息・生育環境、河川景観の維持形成、清潔な流水を保持し、これまで同様の水利用がなされるよう努める。

河川環境の整備と保全に関しては、下流河川敷に広がるヨシ原や中流部堤防法面等に分布するケヤキ、クルミ、ヤナギ等の郷土樹木、さらに上流域に現存するブナなどの山地性の植生について保全を図ることとし、また、現状における多くの瀬や淵といった河川形状

の自然特性を十分に考慮し、サケ等の遡上の妨げとならないよう河川の連続性を持たせた整備を図るなど、流域や河川に生息する動物の生息環境の保全を図る。

また、現在の良好な河川景観の保全と良好な水辺景観の保全に努め、人と自然とが共生できる河川環境の創出に努める。

河川の維持管理に関しては、これら河川の特長や地域の風土・文化・歴史をふまえて、親しみのある川づくりをめざし、住民参加による地域との連携を図りながら維持管理に努めていくものとする。

## 2. 河川の整備の基本となるべき事項

### 2-1 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

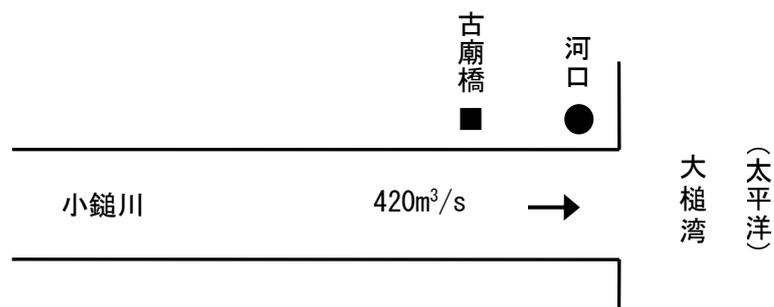
基本高水のピーク流量は、主要な洪水より検討し、基準地点古廟橋において  $420\text{m}^3/\text{s}$  とし、これを全て河道により流下させる。

基本高水のピーク流量等一覧表

河川名	基準地点名	基本高水のピーク流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	洪水調節施設による調節流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	河道への配分流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )
小鎚川	古廟橋	420	—	420

### 2-2 主要な地点における計画高水流量に関する事項

計画高水流量は、古廟橋地点において  $420\text{m}^3/\text{s}$  とする。



小鎚川計画高水流量配分図

### 2-3 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

小鎚川の主要な地点における計画高水位及び概ねの川幅は、次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 (T. P. m)	川幅 (m)
小鎚川	古廟橋	1.25	3.07	60
	河口	0.04	* 13.50	90

注) T. P. : 東京湾中等潮位

※ : 計画津波高

### 2-4 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

小鎚川において、流水の正常な機能を維持するため、関係機関等との連携のもと、健全な水循環系の構築を図りつつ、これまで同様、適正な水利用がなされるよう努めるものとする。

# 小鉚川流域概要図

